

アテネと名古屋の森の中

現代国際学部現代英語学科教授 ムーデイ美穂

二年前の夏である。夜中の十二時とはつと過ぎていただろうか、イギリス南部ウインチェスターの静かなホテルの一室で、一人私は悶々としていた。現代英語学科一年生の短期留学引率中であつた。到着して早々、一人の学生が熱を出した。最初のうちは、単なる旅の疲れだね、と言いつつ合っていたが、時には三九度まで熱は上がり、頓服を飲んで一時的に下がると、すでに一週間経っていた。ホストファミリーは手厚く看護してくれていたが、初めての海外で、初めて親元を離れ、言葉もろくに通じない状況で、その学生は原因不明の高熱に苦しんでいた。その夜すでに何度目かの彼女からの電話を切つた後、食事に行く気持ちにもなれず、ルームサービスを頼んだ。受話器を置いた途端、また電話が鳴つた。「ひよつとして下がつたのかも」と、一抹の希望を持つて出ると、違う学生からの電話であつた。消え入るような声が「……せんせえ、ホストマザーに今スグ出て行けって言われてます……」。日本語だから周りに解るはずはないのに、気を使って蚊の泣くような声であつた。この学生は、到着早々から、ホストファミリーと問題を抱えていた。ステイ先を変えることが決まり、明日に引越しを控えた前日の夜中であつた。ともかく「明日の朝出て行くって言ふんなら、今から出て行け！」とわめいているお母さんに電話口にてでもらつた。「こんなワガママ娘見たことない

わよ！」と喚きちらすお母さんになんとか落ち着いてもらい、明日の朝、迎えのタクシーが来るまではちゃんと面倒を見てもらうよう、約束を取りつけた。念のため大学のディレクターにも連絡し、やつとその日の電話合戦は終わった。ルームサービスで頼んだフィッシュアンドチップスはすでにベタツとした油の残骸になつていた。手を付ける気にもなれず、私は部屋の中をぐるぐると歩き回つた。熱はいつ下がるんだろう？ 病院での見立ては正しいのだろうか？ ホームステイ先で困っているあの子は大丈夫だろうか？ 今頃ホストマザーに追い出されたりしていないだろうか？

イギリスの夏の朝は早い。窓の外にはすでに朝の気配が漂っていた。少し開けてみると、ひんやりとした空気が流れ込み、疲れた頭に心地よかつた。ベッドに横になる気もせず、PCの前に座つた。メールを開けると日本からいくつかメッセージが届いている。その一つがゼミ長Nからのものであつた。「彼からは珍しいな、夏休みなのに」と思いつつ読んだその内容のせいで、私のアタマはさらに覚醒してしまつたのである。

「今日、みんなで集まって、OCFでやる英語劇について話し合いました。『真夏の夜の夢』をやることにしましたのでよろしくお願いします。『真夏の夜の夢』？ シェイクスピア？ 俄かには信じられず、すぐに返信した。まさか『真夏の夜の夢』と題したジャニーズとかAKB48の歌とか、月九ドラマの焼き直しとかじゃないでしょうね。それに対し帰つて来たメッセージは「ジャニーズの『真夏の夜の夢』とか知らないんで(笑) 大丈夫です。シェイクスピアです」というものであつた。

OCF——オーラルコミュニケーションフェスティバルとは、他大学合同の英語パフォーマンス発表会である。大学英語教育学会に属するコミュニケーション研究会が年に一度開催するもので、東京や関西、広島

などから毎年八十校ほどの参加がある。発表は英語であれば、劇、歌、リーダーズシアター、スピーチと何でも良い。私のゼミではその年、初めて英語劇で参加することが決まっていた。夏休み中にやりたい劇について考えておくように、とだけ学生に伝えておいた。私から一度としてシェイクスピアを口にしたことはなかった。英語劇、というとすぐにシェイクスピアを連想し、敬遠してしまう学生が多いからである。

もう、眠るどころではなかった。「真夏の夜の夢」？ シェイクスピア？ どうしてそうなったの？」何度も頭の中で同じことを繰り返しながら、また部屋の中をぐるぐると歩き出した。ほんの数分前に歩き回っていた時とは、全く違う気分であった。空はずでに白々と明け、小鳥のさえずりが聞こえていた。窓の向こうにはこんもりとしたウインチェスターの緑が広がっている。「もしかして、今日は良い一日になるかもしれない。」大きく息を吸い込み、そんなことを思った。「あの子の熱もじきに下がるだろう。夕べ追い出されそうになってたあの学生も、今日は新しいステイ先で、良い家族に出会えるだろう。」そしてその日以降、実際にそうだったのである。

『真夏の夜の夢』読んだことあるの？ ていっか内容知ってるの？

普通にやったら三時間だよ。各大学の持ち時間は三十分だから、うんと縮めることになるよ。何かアイディアはあるわけ？ しかも劇中劇とかあるんだよ。劇中劇ってわかる？」と永遠に続きそうな私の質問に対する学生たちの答えは次のようなものだった。まず日本語訳を読み、自分たちが大事だ、好きだ、と思うところを残してプロットを立て直し、日本語台本を作る。読み合わせをして三十分にまとめる。「それでも作ってきた台本を英訳して出来上がりっす」とインスタントラーメンでも作るかのようである。なるほど、と一瞬感心したが、果たしてそんなやり方ありなのだろうか。親しくしていただいている世界演劇の教授に相談

してみると「面白いこと考えますねー」というお返事であった。面白ければ良いか、とGOサインを出し、二学期早々台本作りが始まった。

三時間の劇を三十分に縮めるため、彼らは色々と工夫をした。セリフを大幅にカットし、登場人物の統合・分割も行った。何人もいる妖精たちを一人にまとめ、ロビンと命名した。「ロビンはバックと同一人物だけど？」念のため聞くと、「分解しました」とのこと。同様に六人いる職人たちもボトムとクインズの二人に凝縮し、劇中劇「ピラマスとシスビーの物語」では代わりに漫才を披露する。キャスト九人中、男子学生が二人と圧倒的に少ないので、ライサンダーとデイミートリアスは女子が演じ、シーシアスとボトムは兼務、同じようにオベロンがクインズも兼務する。自分たちのやりたいよう進めていく姿があまりにも自由過ぎて、当初の「大丈夫？」という気持ちはいつの間にか消えた。見たこともない、新しいものが生まれるような気がしていた。それを果たしてシェイクスピア作品と呼んで良いかどうかはわからなかったが、二ヶ月後、どんなシロモノができるのか考えるのは不安と恐怖であり、楽しみでもあった。そして彼らがやりたいようにやれるよう、極力口出しはしないことに決めた。

高校時代に演劇をやっていたり、バレエ、バンド、よさこいなど、身体表現に関わる活動をしていた学生が牽引したということもあったであろう。そうでない学生も、面白そうだから頑張ってみよう、という素直さで、週に何度も自主的に練習していたようである。何かの授業中、隣の教室があまりにもうるさいので、静かにさせようとしてみるとこの学生たちのリハーサル中、ということも一度ならずあった。毎日のように「今日は〇〇教室で練習します」とメールが入る。時間がある限り付き合っていたが、たまにその連絡がない日、一人研究室にいると不思議な気分になることがあった。「どこかで練習してるのかな」とふと思ひ、窓

の外を見る。すると、まだまだ残暑厳しいうだるようなキャンパスのあちこちに、木々がすると生え出していく。枝は緑の葉をこどもりとたたえ、校舎の窓や屋上や駐車場を覆う。蔓が教室の壁を這っていき、もうそこに大学はない。往來の喧騒も消え、音も匂いもない。日光を木々に遮られ、ひんやりとしたその森は薄暗く、学生たちは妖精やアテネの恋人たちに姿を変えて、そこそこに棲んでいる。遊んだり、ケンカしたりしているかもしれない、そんな感覚であった。

十一月も半ばに入り、台詞や動きを憶えると、俄然、練習は楽しくなつた。余裕が出てきて、舞台で色々な「実験」や「遊び」が始まる。「こうやったらどう？ ああやってみたら？」と声飛び交い、笑いが起こる。

台本作成から約二ヶ月が経ち、十二月十日、とうとう公演当日を迎えた。会場である南山大学に集合し、舞台や照明、音響機器を確認した後、それぞれが着替えやメイクを始めると、私にはもうすることがなかった。差し入れのおにぎりや飲み物を買に行ったり、舞台と控室の間を無駄に行ったり来たりしているうちに出番の時間となった。皆、定位置にスタンバイし、音響も照明も準備OK、あと一分程で始まりの音楽が鳴る、というそのときであった。自分たちより先に発表を終えた他大学の先生方が、「学生の声が小さくて……」と舞台上に集音マイクを置いていたのを見て、私も「あるに越したことはないだろう」とノココ舞台中央に出て行き、そのマイクを舞台の中央にゴロつと置いたのである。その途端、「先生！ そのマイクとけてください！」と舞台の袖からきつい声が飛んだ。「え？」と声の方を見ると、アテネの衣装に身を包んだ女子学生が二人、舞台袖からキッとこちらを睨んでいる。一度は置いたマイクを慌てて掴み、私は袖に駆け戻った。「でもさ、あった方が通っていいんじゃない？」と言うと「要りません！ 却って危ないです。」と言う。その二人の表情は「どうして心配するの？ 大丈夫だから、任せて！」と言っ

ているようだった。そして、私はその時やつと理解した。「そうか、そうか！」と眩きながら舞台袖の階段から客席に戻った。私のすべきことは観客として楽しむこと、それ以外にもう何も無い、ということがやつとわかつたのだ。もうずっと前からこの劇は、私の手から離れていたのだから。何をジタバタしていたのだろう。一回きりの公演ではあるが、新しい劇が今、生まれようとしていて、それを観る機会に恵まれたのだ。私は客席に腰を下ろし、カーテンが上がるのを待った。始まりの音楽が鳴り、パツクの口上が始まる。私は席にゆつたりと座り、他の観客と一緒に笑い、拍手をし、時には大きく声をかけた。でも一つだけ余計に、他の観客は知らない、私だけが知っている楽しさがあることが、すぐにはわかつた。舞台の上で「実験」と「遊び」が今、この本番中にも起こっていたのである。そこには最後のリハーサル時には観ることのなかつた新しい動きや演出があつた。それは練習をずっと見てきた者には味わえない発見だった。今まで多くの劇を観てきたつもりだが、こんな楽しさもあつたのか、と拍手をする手にさらに力を込めた。

彼らがなぜ、『真夏の夜の夢』をやることにしたのかは未だにナゾである。本番に至るまでには当然、楽しいことも、大変なこともあつた。でも思い出すのは、シェイクスピアの生誕地であるストラッドフォードから二〇〇キロ以上離れたウインチェスターのホテルで「なんで？ なんで？」と一人眩きながら部屋の中をぐるぐる歩き回っていた自分の姿である。公演が終わつた後、研究室からは衣装や小道具が引き上げられ、ぽっかりと穴が空いたようであつた。学生達との話題も「ドレスが短くて大変だったー」や、「あの時実は……」といったトリビア的なものから、就職活動に関することへと徐々に変わっていった。あの一連の出来事はまさに「夢」だったのかしら、と気取って思ったりする。でも学生にとつては決して「夢」のような出来事ではなく、確かな経験として未来に繋がるものであつて欲しい、と思つている。

(むーでい みほ)